

御伽草子

北畠八穂



古典文学全集〈13〉

御伽草子

北畠八穂



北 畠 八 穂

御 伽 草 子

ポプラ社 昭和40 (1965)

261p 23cm (古典文学全集 13)

[分類] 918

著 者 略 歴

青森県に生まれ、実践女学校(現実践女子大)専攻科を中退。現在、創作・詩作に専念。日本文芸家協会、日本女流文学者協会、日本ペンクラブ会員。主な著書には「もう一つの光を」「雪童」「またなき今を」「未知の世界へ」「東宮妃」「アダ名は進化しつつ」「米粒お嫁」「マコチン物語」「あぐたれ童子ポコ」「破れ穴から出発だ」等、多数ある。

古典文学全集・13

(著者との話し合いにより検印廃止)

御 伽 草 子 480円

編著者・北畠八穂

発行・昭和40年12月5日 ©

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271番

活版印刷・新興印刷製本株式会社

オフセット印刷・有限会社 トライ印刷所

口絵原色印刷・株式会社 双美堂

製本・富士製本株式会社

クロス・東洋クロス株式会社

本文紙・北越製紙特瀬上質

は し が き

『御伽草子』は、低学年くらいの子どもでも、したしめる物語です。南国の強い日差しをさえぎる木かげの水辺で、北国の雪あかりの窓下の炉辺で、語りつがれてきた物語です。へきむかし、あるところにね〳と、語り手が聞き手の顔を見まわせば、へん、それで〳と、つぎを催促するひなびた声が聞こえてくる一つ

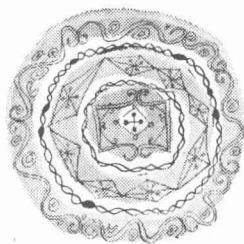
一つの物語が集まったものです。なつかしみにあふれています。物語のふるさとといった味わいです。

この全集のこのほかの物語が、その時代で、学問があり、才能にめぐまれた作者が、魂こめて、まとめあげた作品であるのとは、まるきり反対なできのものです。『御伽草子』は、国じゆうに戦争がたえなかった南北朝時代から、徳川時代のはじめころまでの三百年間にできたのです。しかもだれがつくったか、わからない物語までが集まっています。まるで自然にはえた大木みたいです。この木の実は、おさない子ども、もぎたくなる匂いと色あいの、たのしい実なのです。この物語の実は、子どもだけでなく、くらい不安な時代をすごす学問もない大勢のおとなたちにも、おいしい栄養になりました。字もろくに読めず、まして心の目がない人たちに、たのしさとしてしみこみ、すこしずつ心の目をあけた『御伽草子』は、暗やみにだれの目にも見える、明かりをつけた大きな使節の役目をはたしています。



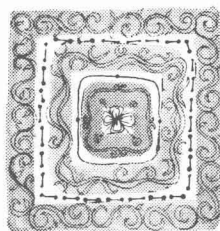
《目次》

蓮華姫姉妹物語	六
鉢かつぎ	四
御曹子島渡り	亮
唐糸草子	吾
木幡ぎつね	四
酒呑童子	八
浦島太郎	二〇
猫の草子	一〇
梵天国	二五
ものぐさ太郎	三四
七草草子	一五



依藤太物語	たわらとう た もの がたり		一五
熊野の御本地の草子	くまの ごほんち そうし		一七
鶴の草子	つる そう し		一九
二十四孝	に じ う し う こう		二九
福富長者と貧乏藤太	ふくとみ ちやうじや びんぼうとうた		三六
解説	かい せつ		四六

装てい 新井五郎
さし絵 武部本一郎
カット 難波淳郎



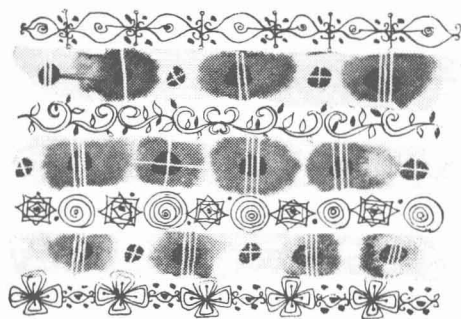
御^お

伽^{とぎ}

草^{ぞう}

子^し

北
畠
八
穂



蓮華姫姉妹物語れんげひめしものがたり

(文正草子ぶんしょうそうし)



鹿島大明神かしまだいめいじんの神主かみぬしに、大宮司だいみやうじという長者ちやうじやがありました。五人の男の子は、知恵ちえも美しさも万人ばんにんにまさり、一万八千軒げんの家をもち、かず知れない召使めしつかいをはたらかせる長者ぶりでした。

大勢おおぜいの召使の中でも、ひとときわめだつ、心からまめまめしくはたらく文太ぶんたという名の男がありました。大宮司が、文太をためそうとしたのか、

「おまえは何年もはたらいてきたが、どうも氣にいらぬ。どっこへでも出て行つちまえ。心をいれかえたら、また、帰つてこい。」

まじめすぎる文太は、考かんがえこんだあげく、

「千万人の召使が私ひとりになつても、命いのちのかぎりおつくし申すつもりでした。が、こうなつてはぜひもない。どこへ行つても大宮司さまをたいせつに思います。いづれ帰つてまいります。」

と、あてもなく出て行き、歩きに歩いて、つのおかが磯いそという塩しおつくりをする浜村はまむらにつきました。つかれきつた文太は、一軒の家へはいつて行つて、頼たのんだのです。

「旅たびの者です。お情なさけをかけてください。」

この家のあるじは、見知らない者だが、見るからにかわいそうだと思つて、泊とめてやりました。

何日もぼんやりしているだけの文太に、あるじが、

「たいくつでしょう。塩^{しお}つくりのまきでもとってくださいませんか。」

「そうでした。おやすいご用です。」

文太は、いそいそと出かけ、五・六人前のまきをかるがと、とってききました。あるじは、いい人がきてくれたものだと大喜びでした。何年か一心^{いっしん}にはたらいてから、文太は、ある日、

「どうぞ、ごほうびに塩釜^{しおがま}をひとついただきとうございます。塩をつくって売ってみたいので、お願い申します。」

あるじは、よくはたらくのでだいにしました文太に、塩釜^{しおがま}をふたつくれました。

ていねいで念入^{ねんい}りな文太が塩をやくと、よその釜の三十倍も、みごとな塩ができました。

文太の塩は味^{あじ}がよく、食べた者はめきめきじようぶになり、若くなる塩でした。すごい売れゆきで、文太はみるみる財産家^{ざいさんか}になりました。

財産はふえるばかり、年月かさねて、文太は長者^{ちやうじや}でした。つのおかが磯^{いそ}の塩屋たちが、そっくり手下^{てした}になりました。だから文太とは呼ばず、《文正^{ぶんしょう}つねおか長者》というようになりました。

屋敷^{やしき}もひろく、家かずもおおく、大勢^{めいしつ}の召使もよくなつき、昔から名高いインドの須達長者^{すだつちやうじや}（釈迦^{しやくか}のころ中インドの舍衛国^{しやえこく}の長者）も、こうかとうわさされました。で、常陸^{ひたち}の国（茨城県）の者は、あらそって、文正つねおか長者に仕え^{つか}ました。みるみる召使はふえるいっぽう、財産^{ざいさん}はふえるいっぽうでした。このうえないしあわせとうらやまれました。

たつたひとつ不足なのは、子どもがないことでした。

文正ぶんしょうつねおか長者ちやうじやの栄えさかぶりは、鹿島かしまの大宮司だいぐうじの耳にもはいり、あの文太ぶんたがとふしぎがり、お目にかかりたいと使いをやりました。文太も、もとの主人まねの招きまねにうれしくなり、ひさしぶりに会えるたのしさにいそいで出かけました。

大宮司の屋敷やしきへつくと、昔の文太になつて庭へ手をついてかしこまりました。大宮司は、

「もとは私の召使めしつかいでも、今は文正ぶんしょう長者ちやうじや。」

と、上へあげて、長者どうしのもてなしをし、

「きこえる長者になられて、めでたい。したが、私には、かなわないといっているそうだが、それはどういうことかな。」

「はい、蔵くらも宝たからも、身にあまるほどでございますが、あとをつぐ子どもがございません。」

「それは第一の宝がない。どうぞ子どもをさずけてくださいと、神さまにお願い申しなさい。」

もつともなことだと、文正長者は家へ帰り、むしゃくしゃして、奥方おくがたをしかりつけ、

「出て行っちゃえ。」

と、どなりました。情けなさぶかい文正長者なのに、いつにないけんまくなので、奥方はおどろき、

「どうしたわけでございますか。」

と、あわてました。文正長者も、すこし恥はじて、

「わるかった。いそいで子どもを生んでくれ。」

これには、いつそうびつくりした奥方^{おくがた}が、

「二十代、三十代で子を^う生めなかった私が、どうして四十代の今、子どもが生めましょうか。」

道理^{どうり}だと文正長者^{ぶんしょうちやうじや}は、うなずいて、

「そこでだ。神さまにお願い申すよりないと、大宮司^{だいみくうじ}さまも申された。そうしようではないか。」

相談^{さうだん}のうえ、七日間身をきよめ、鹿島大明神^{かしまだいみょうじん}へお参^{まい}りし、かずかずの宝物^{ほうもつ}をささげ、三十三度おがんで、

「子どもを、おさずけくださいませ。」

と、心をこめて祈^{いの}りました。七日めの夜中^{よなか}、明神さまのとびらが、ぎいと開いて、気高^{けだか}い声が、

「一心^{いっしん}な祈りだから、この七日間、おまえたちの子どもになるものを、ありったけさがしまわったが、どこにもない。で、これをさずける。」

と、おおせられて、ふっと声は消えました。あとに蓮華^{れんげ}が二本あったのです。文正長者は、大喜びで奥方に、さずかった二本の蓮華をわたし、

「八か国にもない、すぐれた男の子を^う生めよ。」

と、頼^{たの}みこみました。奥方のおなかに赤ちゃんができたようすがみえ、十月^{とつき}めに生まれました。

「なあと、美しいお姫さまでしょう。」

だれが見ても、みとれる美しい女の子でした。文正長者だけは、腹をぷりぷりたてて、

「約束^{やくそく}したのに、女の子なんか生んで。」

と、奥方おくがたをしかりつけました。わけのわかった侍女じじよたちは、口をそろえて、

「姫君さまこそ、お家が繁盛はんじようしてめでたいのに。」

「そんならば、だいにじにするか。」

思おもいなおした文正ぶんしょう長者ちやうじやは、かわいがりだしました。その翌年よくねんも、また姫が生まれました。

文正長者は、あきれかえったおこりようで、

「またまた私の願ねがいにそむいたか。生うまれた子をつれて、さっさと出て行け。」

と、奥方をにらみつけました。侍女たちは、

「若君わかくみでしたら、大宮司だいぐうじにお仕つかえなさる方かたになりましょう。が、姫さまだから、大名方だいみょうがたの奥方にもなられ、大宮司の若君からも、ほしいとのぞまれましょう。これにこしたことはありません。」

と、だいて文正長者に見せた妹姫は、美しい姉姫にまさる美しさなので、文正長者は、

「ほんにだいにじにしよう。」

と、きめたのです。気高けだかい声がさずけた蓮華れんげをとって、姉の名は《蓮華》とつけました。翌年よくねん生まれた妹は、《蓮御前》と名づけたのです。

姉妹しまいの姫は、育またつにつれて美しさはまし、かしこくて、本もすらすら読み、よくわかり、歌も舌したをまぐほどよくできました。

ぐるりに住む八か国の大名たちは、われもわれもと姫君姉妹を奥方にもらいたがりました。

姫君姉妹は心の中で、こんな東国とうこくではなく、京都近くへ生まれたのなら、帝みかどが后きさきにほしいといわれよ



うものをと、大名たちへは目もくれず、ひたすら神仏にお参りをしていました。

じれた大名たちは、姉妹の姫がお参りする途中からさらおうと、たくらみました。これを聞いた文正長者は、屋敷の西すみに御堂をつくって姉妹の姫を参らせ、外へ出さなくなりました。大宮司も姉妹のうわさを聞き、

「大名たちへくれるより、うちの子にくれ。」

と、文正長者に申しこみました。

万人にすぐれた大宮司の男の子たちを知っている文正長者は、このうえなく喜んでしまい、「さあ、大宮司家のお嫁さまになれようぞ。」

と、姉妹の姫に申しました。が、姫たちは、さもいやそうに涙さえうかべて申しました。

「京の都の御所に仕える方か、できれば帝ならばべつ、でなくば尼になりとうございます。」

こまりはてた文正長者は、このとおりを大宮司へ、恐るおそる伝えますと、大いかりで、「とんでもないこと、いつけをそむくなら、おまえをおもい罪にする。」

とせめました。文正長者がますますこまって、家へ帰って姉妹にそういうと、姫たちは、

「では、水にはいつて死んでしましましょう。」

と、決心のさまなので、肝をつぶした文正長者が、また大宮司のところへ、わけをいつてわびに行く
と、さすがの大宮司も、

「それほどまでなら、私もまけた。」

と、さも残念そうでした。

さて、その後に、衛府えぶの藏人くらんどというのが、常陸ひたちの国をおさめにやってきました。常陸の国の大名たちは、われさきにと、自分の姫たちを、藏人くらんどの奥方おくがたにしようと、見せましたが、どれも氣にいきりません。そこへ、文正長者ぶんしょうちやうじやの姫君のことが藏人の耳にはいりました。

藏人はさつそく大宮司だいぐうしを呼びよせて、

「おまえがつかっていた者の娘むすめだから、おまえが骨ほねをおつてみなさい。もし、その娘が私の奥方おくがたになれば、おまえに常陸の国をおさめる国司こくしの位くらゐをやろう。」

「なかなかむつかしいことではございますが、できるかぎりやってみましょう。」

と、国司の位がほしくて、前に、こつびどくことわられたのに、文正長者にむかい、

「おれが国司になれば、おまえを代官だいかんにする。」

文正長者は、すっかりうれしくなって家へもどり、

「めでたい、めでたい、女の子は持つべきもの。国司さまを婿むすめにできるぞ。」

屋敷やしきじゅうわきかえつて、めでたがりました。が、姉妹は、悲しげに泣くばかりでした。

両親そろって力をつくして、なだめました。

「ただ死にたい。」

と、姫たちは泣くばかりです。しやうがなくて、すごごと文正長者は大宮司のところへ行き、

「こうこうゆえ、娘むすめの命いのちをお助けください。」

と、親心で頼みました。大宮司も国司藏人へ、

「じつは、私も私の息にと思ひまして。」

と、はじめからのわけを、そっくり話しました。国司の藏人は、がっかりして、

「死ぬ者を、もらつても、どうにもなるまい。のぞみもたえた。常陸の国にいたくない。」

と、都へ帰って行きました。帰つても、なお心残りでしかたなく、みやげ話にもつい、

「常陸の国に、こうこういうすばらしい姫君が姉妹でいまして……」

と、語るのです。それを日本じゅうでいちばん位の高い人の若君が聞きとめ、根ほり葉ほり聞きたずねずにいられたのです。

この若君は、どんなに申し分のない姫君を見せられても、お嫁にしようといわない若君でした。

常陸の国、文正長者の姫の話聞いてから、この若君は気重い病氣になつてしまったのです。どうしたことかと心配した家来が、

「思ひつめたのぞみをおしやつてください。唐・天竺までも、おのぞみのものをとりに行つてきます。」

と、熱心に聞きますと、若君ははずかしげに、

「では、いうけど、藏人が、あんなにも語る常陸の国の文正長者の姫を嫁にほしい。」

と、涙をぼろぼろこぼしました。その家来は、

「それならば常陸の国へお供しましょう。」

と、立ちあがり、若君は元氣がでて喜びました。ぬかりなくしたくし、供ぞろいして、出かけました。